

京都大学若手人材海外派遣事業 スーパージョン万プログラム
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成27年〇月〇日

1. 渡航者			
氏名	石井英真	採択年度	2014年度
部局	教育学研究科	電話	
職名	准教授	メール	
研究課題名	高次の学力を実現する教師教育の方法論に関する研究		
海外渡航期間	平成26年9月2日～平成27年3月7日		
2. 渡航に関する情報			
渡航先	国名：アメリカ合衆国 大学等研究機関名：スタンフォード大学 研究室名等：教育学大学院 受入研究者名：Ann Lieberman 教授		
渡航期間中の出張 (渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。) ※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。	出張先：Clarendon Alternative Elementary School San Francisco (CA) 目的：授業見学と教師へのインタビュー。 期間：2014/9/16、10/2、10/9、10/29、2/27 出張先：Mills College Oakland (CA) 目的：Catherine Lewis 氏へのインタビュー。 期間：2014/10/16 出張先：UCLA Carnesale Commons Los Angels (CA) 目的：National edTPA Implementation Conference 2014 への参加と資料収集。 期間：2014/10/23 - 25 出張先：Mission High School San Francisco (CA) 目的：CES(Coalition of Essential Schools) Fall Forum 2014 への参加と資料収集。 期間：2014/11/6 - 9 出張先：San Antonio (TX) Churchill High School Johnson High School Madison High School 目的：共同授業研究の打ち合わせ。授業観察と授業分析。 期間：2014/11/16 - 20 出張先：New York Teachers College Columbia University Harlem Village Academies Leadership (East) Elementary School 目的：Makoto Yoshida 氏や教師たちへのインタビューと文献調査。 期間：2014/11/20-25		

	<p>出張先：University of California, Berkeley 目的：Aki Murata 氏へのインタビューと資料収集。 期間：2015/2/12</p> <p>出張先：University of California, Berkeley 目的：Alan Schoenfeld 氏へのインタビューと資料収集。 期間：2015/2/27</p>
<p style="text-align: center;">3. ジョン万プログラムによる成果</p> <p>以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。ページ数については増加してもかまいません。</p>	
<p>国際共著論文の執筆 (論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等)</p>	<p>Koji TANAKA, Kanae NISHIKA, Terumasa ISHII, <i>Curriculum, Instruction and Assessment in Japan</i>, Routledge の Chap.3 “Theories of the Models of Academic Achievement and Children’s Character Development”, Chap. 4 “Historical Overview of Lesson Study”, Chap. 6 “Various Methods for Organizing Creative Whole-Class Teaching” を 2015 年度中に執筆予定 (タイトルはいずれも仮)。</p>
<p>更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ/実施 (国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等)</p>	<p>ミルズ大学の Catherine Lewis 氏や、カリフォルニア大学バークレー校の Aki Murata 氏らの協力を得ながら、「授業研究 (lesson study)」に関する国際比較研究を構想中である。関連して、帝京大学のサルカル・アラニ・モハメド・レザ氏を研究代表者として応募中の科学研究費補助金・基盤研究 (B) (平成 27 年度～平成 31 年度) 「授業実践学の文化的基底に関する比較開発研究」に研究分担者として加わっている。</p>
<p>国際研究ネットワークの新規構築/深化 (参加した学会やその他の学術・交流組織、そこから構築/深化した研究ネットワークの内容等)</p>	<p>(1) SCALE (Stanford Center for Assessment, Learning and Equity) を軸にした研究ネットワークの構築 渡航者が所属したスタンフォード大学教育学大学院のセンターである SCALE は、初等・中等教育段階の児童・生徒たちを対象にした「パフォーマンス評価 (performance assesment)」の開発研究と、教師を対象としたパフォーマンス評価の開発研究を行っている。 児童・生徒を対象とするパフォーマンス評価については、PBL (Project-Based Learning) とパフォーマンス評価の効果を検証する研究プロジェクトのミーティングに参加し、研究手法について学ぶとともに、研究スタッフと意見交流を行った。 教師を対象とするパフォーマンス評価については、SCALE が推進する教員評価システムの edTPA について、研究スタッフから聞き取り調査を行うとともに、彼らが主催する、全米の教師教育担当者向けの National edTPA Implementation Conference に参加し、そこに参加した各大学の教師教育者と交流を深めた。</p> <p>(2) バイエリアの授業研究グループを軸にした研究ネットワークの構築 米国のバイエリアを中心に「授業研究」(日本発祥の現職教員の学校ベースの力量形成のシステム)の取り組みを推進している、Catherine Lewis 氏や Aki Murata 氏、Silicon Valley Math Institute の授業研究のリーダー的教師である Jacqueline Hurd 氏や Jana Morse 氏らと意見交流を行うとともに、彼らが主催する研究授業や現職教員向けのワークショップやカンファレンスに参加した。そして、ワークシ</p>

	<p>ヨップやカンファレンスに参加している初等・中等学校の教師たちと交流を深めた。</p> <p>ニューヨークで授業研究を軸にした学校づくりを進めている Yoshida Makoto 氏など、バイエリア以外の授業研究ネットワークともつながりを持つことができた。</p> <p>(3) 米国の教育現場とのその他のネットワークの構築</p> <p>CES(Coalition of Essential Schools) Fall Forum 2014 への参加や、「フィールド研究の進展」の欄に記載した小・中・高等学校への学校訪問を通して、米国の実践動向の継続的な調査につながる実践家とのネットワークを構築することができた。特に、テキサス州 San Antonio において、現地の教諭である Yuka Kato 氏や John Cadena 氏らとは、第二言語習得に関する共同授業研究を行い、その成果は 2015 年秋に日本教育方法学会で発表予定である。</p>
<p>在外研究経験による研鑽</p> <p>(渡航先機関で得た研究の展開方法、研究室の運営方法、教育方針・人材育成方法等)</p>	<p>たとえば、遺伝子とコンピュータといった、一見遠いように見える分野の両方に精通することで、スタンフォード大学では、新しい研究分野や方法論が創発されていた。それぞれの分野の専門性を深めていくことはもちろん重要であるが、異分野の専門家が集い、自由に対話することで、新しいものが絶えず生まれ続ける、そうした出会いとコミュニケーションの場のコーディネート的重要性を感じた。</p> <p>教育学という分野はもともと実践的かつ学際的であり、院生指導においても、自分の専門を深めつつも、文理を超えた異分野の研究者と対話することを促していきたい。また、海外の研究者や実践家と交流する機会をより多く準備するように努めたい。</p>
<p>フィールド研究の進展</p> <p>(渡航先国で実施した実地調査や文献調査等の内容)</p>	<p>(1) 文献調査</p> <p>米国で展開中の Common Core State Standards とパフォーマンス評価を中心とするカリキュラム改革全般に関する文献資料、および、特に米国の重要課題である算数・数学教育の改革に関する文献資料の収集を行った。</p> <p>教師の学習に関する研究動向や、Common Core State Standards と並行して進行している教師教育改革に関する文献資料の収集を行った。</p> <p>米国での教育改革の基本的な考え方である、「スタンダードに基づく教育改革」と「エビデンスに基づく教育」に関する文献資料の収集を行った。</p> <p>(2) 学校訪問と授業観察</p> <p>Common Core State Standards とパフォーマンス評価を中心とするカリキュラム改革が教育現場にどのような影響を与えているのかを調査すること、そして、日米の授業方法や教室文化の違いを明らかにすることを目的として、下記の学校を訪問し様々な教科の授業見学を行うとともに、教師たちへのインタビュー調査を行った。</p> <p>カリフォルニア州では、Clarendon Alternative Elementary School (San Francisco : 5 回にわたって継続的に訪問した), Leadership High School (San Francisco), Wlter Hays Elemantary School (Palo Alto), JLS Middle School (Palo Alto), Jordan middle school (Palo Alto), Menlo School (Atherton), Mills High School (Millbrae), Willard Middle School (Berkeley : 研究授業と授業後の検討会にも参加した), Morrill Middle School(San Jose : 研究授業と授業後の検討会にも参加した), DAVES AVENUE ELEMENTARY(Monte Sereno : 研究授業と授業後の検討会にも参加した)を訪問した。</p> <p>カリフォルニア州以外では、テキサス州の Churchill High School, Johnson High</p>

School, Madison High School (いずれも San Antonio : 現地の教師と授業プランの作成、授業の実施、改善に向けた検証作業を行った)、ニューヨークの Harlem Village Academies Leadership (East) Elementary School (New York) を訪問した。

(3) 研究者へのインタビュー調査

先述のように、SCALE の研究スタッフ (Ruth Chung Wei 氏や Kendyll Stansbury 氏ら) との交流やインタビューを通して、初等・中等教育段階と教師教育におけるパフォーマンス評価の現状と課題について学んだ。

スタンフォード大学でのホストである Jonathan Osborne からの情報提供や彼のセミナーでの院生との交流を通じて、科学教育の新しいスタンダード (Next Generation Science Standards : NGSS) をめぐる最新動向について学んだ。また、Common Core State Standards を軸とした、米国の新しいスタンダードとアカウンタビリティのシステムの構築を牽引するスタンフォード大学の研究者 (Michael Kirst など) に、その意義と課題について聞き取り調査を行った。

スタンフォード大学の教師教育プログラム (Stanford Teacher Education Program : STEP) の取り組みを調査すべく、それを統括する Rachel Lotan 氏と Ira Lit 氏へのインタビューを行うとともに、初等と中等それぞれの算数・数学の教師向けの授業を見学した。そして、授業を担当している教師教育のアドバイザーにもインタビューを行った。

教師の学習共同体論や授業研究など、現職教員の学習を支援する学校ベースのシステムについて、ホストである Lieberman 氏の学校改革に関する研究からも学びつつ、授業研究については、Catherine Lewis 氏や Aki Murata 氏に、そして、算数・数学教育を中心とした教師の力量形成の方法については、カリフォルニア大学バークレー校の Alan Schoenfeld 氏やスタンフォード大学の Jo Boaler 氏にインタビューを行った。